

〔在外研究報告〕

トランプの壁と向き合う国境地域 — 米国サンディエゴを拠点として —

川久保文紀

はじめに

1. サンディエゴと SDSU
2. テキサスにおけるホームランドセキュリティ学会—国境の西端から東端へ
3. 「国境産業複合体」の実態—ナショナル・ホームランドセキュリティ・カンファレンスへの参加
4. 開かれた国境ガバナンス—「スマートな国境連合」定期協議と国境を越える水問題
5. 国境を守る側のミッション—米国国境警備隊による国境パトロールツアー
6. オルガンパイプ国定公園と環境破壊—アリゾナ州再訪
7. マンザナー日系アメリカ人強制収容所—担当科目である平和学と政治学原論の生きた教材
8. もうひとつの国境地域—エルパソ・シウダーファレス国境地域

おわりに

はじめに

筆者は、2019年度の中央学院大学在外研究員規程にもとづき、専門領域である境界研究（ボーダースタディーズ）の理論的彫琢および北米地域（とくに米国・メキシコ国境地域）の国境管理の現状を調査するために、米国カ

リフォルニア州にあるサンディエゴ州立大学 (San Diego State University: 以下、SDSU) 政治学部に客員研究員として1年間在籍した。滞在中、米国・メキシコ国境の西端に位置し、まさに現在進行形であるトランプの壁建設の最前線であるサンディエゴを拠点して、さまざまな国境地域の実態をつぶさに観察することができた。2019年は、冷戦の二極対立構造を象徴したベルリンの壁の崩壊からちょうど30年を迎えた年であったが、2001年の同時多発テロ以降、世界の要塞化現象を物語るように、国境の壁は増加を辿る一方である。トランプ政権は、メキシコとの国境に長大な壁を建設することを政権公約の主要な柱として誕生したが、在外研究期間中である2020年は米国大統領選挙の年にもあたり、いわゆるトランプの壁建設の是非も大きな争点となっている。国境地域の人々は国境の壁とどのように向き合いながら生活しているのか。国境を守る側はどのようなミッションをもって任務についているのか。双方を架橋するパースペクティブをどこに見出せばよいのか。このような問題意識を念頭におきながら過ごした在外研究生活であるが、本報告ではその全体像について、研究上の知見とともに紹介したい。

1. サンディエゴと SDSU

サンディエゴの人口は140万を超え、全米8位の大都市である（西海岸ではロサンゼルスに次いで2番目）。州の中における広域地方政府であるサンディエゴ・カウンティとしての人口は300万を超す。メキシコ側のティファナを合わせたメトロポリタン国境地域の人口は500万人をゆうに超え、世界有数のメトロポリタン国境地域を形成している。1年を通じた温暖な気候に惹かれて米国内外から移り住んでくる人々も多く、近年の物価の上昇はそれを物語る。とくに中所得者層向けの住宅の不足も深刻になっていることが連日報道されている。

情報通信、バイオサイエンス、製薬・医療機器関連の名だたる企業が本

拠地にするのもサンディエゴである。日本の企業でいえば、武田薬品工業の子会社である武田カリフォルニアや京セラの米国本社もある。軍需産業であるジェネラル・アトムクス（General Atomics）の本社はラホヤ海岸にあり、無人機の研究・開発において世界の最先端を行くジェネラル・アトムクス・アエロノティカル・システムズ（General Atomics Aeronautical Systems）は、サンディエゴ北部のパウエイにある。今回の在外研究の主要テーマのひとつである国境の軍事化と民営化の考察という観点から、両社はさまざまなレポート・資料に頻出する企業であり、取材できるかどうかを探ってみたが、従業員の家族でさえ、その内部に入ることは認められていないとのことであった。軍事機密の集積地のような企業であるので、ある意味、当然ではあった。

サンディエゴはメキシコとの国境まで車で30分弱で行ける距離にあり、ボーダーシティ、あるいはメキシコ側のティファナとセットでツインシティと呼ばれることもある。歴史的にはもともとメキシコの領土であり、米国・メキシコ戦争の結果によって米国に割譲されたことは世界史で学ぶ。筆者の自宅からもインターステイト（州間高速道路）805を南下すると、30分でサンイシドロ国境検問所に行くことができた。メキシコに近づくとその風景も段々と変わっていく。国境付近はメキシコ人であふれており、ここは米国なのかと疑ってしまうほどスペイン語が飛び交っている。これが国境地域（ボーダーランズ）の醍醐味であり、文化、言語、習慣など多様な要素がハイブリッドに混在する生活空間なのである。サンイシドロ国境検問所では施設の近代化も進み、年間1億6000万人の歩行者、4600台もの車両が行き来している。メキシコがフランスに勝利したプエブラの会戦を記念するシンコ・デ・マヨ（スペイン語で5月5日の意味）をサンディエゴのオールドタウンで毎年祝うことも恒例であり、日常レベルでの相互交流は今も密接である

筆者の在籍したSDSUは1897年に創立され、23の大学から構成されるカリフォルニア州立大学機構（California State University System）の中で3

番目に古い歴史をもつ。283エーカー（1.5平方キロ）の広大なキャンパスには、大学院生を含め、約3万5千人の学生が学んでいる。学部数はゆうに20を超え、公立の総合大学であり、スピーチや演劇などに特化した学部もある。キャンパスには芝生の広がる憩いのスペースが多数あり、学生たちは休み時間には芝生に寝そべって読書をしたり、音楽を聴いたり、キャンパス内にあるスターバックスで飲み物を買って仲間と談笑している光景が日常的にみられた。なかには木々の間に手製のハンモックを手際よくつくって昼寝をしたりと、三者三様のキャンパスライフを楽しむ姿が印象的であった。キャンパスが広大であるために、スケートボード用の専用レーンがあちこちにあり、学生たちはスケートボードを器用に乗りこなして講義に向かう朝の風景も米国ならではのであろうか。筆者にとって、ストームホールという社会科学系の学部が集中する研究棟に個人用オフィスが提供されたことはとても幸運であった。米国の大学図書館の充実ぶりはニューヨークの大学院時代にも経験していたが、図書館の在り方も改めて学ぶことが多かった。豊富なデータベースはもちろんのことながら、本や論文を大学間でやりとりするインターライブラリーローン（ILL）には舌を巻く。自分のメールアドレスに本のチャプターや論文が電子的に送付され、しかも原則すべて無料である。ものにはよるが、翌日に届く場合もある。図書館内も勉強用スペースが十分に確保されていることはいうまでもないが、1日中開室している24時間スタディールームで勉強に励む学生たちを横目でみながら私も頑張らねばと自分を鼓舞したものである。また、研究者用のリサーチサービスには、論文執筆に関するさまざまな相談にのってくれるライブラリアンが常駐していた。

5月には、SDSUの日暮嘉子名誉教授が企画・運営された日本語プログラムの表彰式にも出席する栄を得た。SDSUでは、多くの学生が日本語や日本文化を学んでいるばかりではなく、日本の多くの大学とも交流を締結しており、国際交流の盛んな大学でもある。世界各国の言語が飛び交うキャンパスで学ぶことができるというのも米国の大学に在籍する醍醐味のひ

写真1：サンディエゴ州立大学ヘブナーホール（2019年3月26日）



写真2：ソーク研究所付近からラホヤ海岸をのぞむ（2019年5月17日）



とつであり、キャンパス自体が異文化に日常的に触れることのできる空間でもある。

サンディエゴには SDSU 以外にも多くの大学や研究機関が集中している。海洋学や医学の分野において世界をリードするカリフォルニア大学サンディエゴ校 (University of California at San Diego: UCSD)、カトリック系の私立大学であり、この地域では唯一ロースクールをもつサンディエゴ大学 (University of San Diego: USD) があり、とくに、国境地域の抱える地域公共政策としての都市問題を解決していく上で、大学・研究機関の連携教育・研究の取り組みには目を引いた。UCSD が中心となって創設した市民フォーラムであるサンディエゴ・ダイアログ (San Diego Dialogue) は、政治学の重要テーマである「熟議民主主義 (deliberative democracy)」の在り方を考える上で参考になった。生物化学の分野において、ノーベル賞受賞者を多数輩出しているソーク研究所 (Salk Institute) は、研究の面ばかりではなく、美しい空と海に映える左右対称形の建築でも有名であり、観光スポットのひとつになっている (あのピカソを驚かすような建築にしてほしいと研究所創設者の生物学者ジョナス・ソークが建築家ルイス・カーンに依頼したというエピソードがある)。ラホヤ海岸の目の前にたつソーク研究所の窓からは、広大な太平洋をのぞむことができ、屋外テラスで研究者たちが談笑している姿がみられた。

2. テキサスにおけるホームランドセキュリティ学会— 国境の西端から東端へ

筆者の在外研究は、米墨国境の東南端に位置するテキサス州ブラウンズビルで5月に開催された学会に参加することから始まった。筆者にとってブラウンズビルを訪れるのは、2015年のフィールド調査以来、4年ぶりのことであった。その学会とは、テキサス大学リオグランダーバレー校 (University of Texas at Rio Grande Valley: UTRGV) で開かれたホームラン

ドセキュリティ学会（Homeland Security Conference）であり、筆者もひとつのパネルの司会者兼コメンテーターとして参加した。2018年7月にウィーンの国際学会で知り合い、筆者の報告に対してコメンテーターを務めてくれたテレンス・ギャレット教授が主催する学会であり、この学会に参加して、ギャレット教授ら研究者との交流を深めることも在外研究の目的のひとつであった。

この学会のユニークな特徴は、国境に関する研究者ばかりではなく、地元警察やシェリフ（連邦保安官）、テキサス州政府の官僚、そして現地の一般住民などの多様な国境のステークホルダーが参加して、現在の国境管理の在り方についてそれぞれの立場から意見を述べ合い、議論するという性格にあった。学会といえば、研究者だけで発表・議論を行う場であるという理解が一般的であるが、この学会に参加して、一つの公共問題に対して相互関連するステークホルダーどうしが実際に顔を合わせて議論を行い、解決への道筋を探ることの重要性を再認識した。私のパネルでは、ギャレット教授がトランプ政権のゼロトレランス政策（移民・難民の親と子どもを引

写真3：テキサス州ブラウンズビルでの学会風景（2019年5月17日）



き離して収容することから、非人道的であると非難された政策)の問題点についてブラウズビルでの現状を踏まえながら報告をし、メリーランド大学のロバート・クーリッシュ教授がリスク分析を通じた移民政策の陥穽について、モンタナ大学のポール・ポープ教授が政治の言説分析による歴代米国内政権の移民政策について報告を行った。フロアからも多数の質問がだされ、活発なパネルになった。

この学会の開催を前後して、ギャレット教授と一緒に、テキサスの歴史的な古都として知られるブラウズビルを中心に米国・メキシコ国境の東南端にあたる国境地域を巡ることができた。ブラウズビルは、米墨戦争の激戦地として有名である。学会の開催された UTRGV のキャンパスでは、米墨戦争が開戦された史跡が点在していた。キャンパスに国境の壁が存在するのも、他の大学にはない特徴であろう。この在外研究報告を書いている時期に、前学長が NPR (米国公共ラジオ) に出演し、この壁によって大学が所有していたゴルフコースが閉鎖され、荒れ果てた無人の土地になってしまったと述べていた。

2018年末の中米諸国からの「移民キャラバン」は日本でも大きく報道された。サンディエゴ・ティファナ国境地域は最西端の流入口であったが、ブラウズビルは、子どもを含めた大量の移民・難民が押し寄せた最東端の場所である。トランプ政権のゼロトレランス政策によって、多くの子どもが親から引き離されて施設に入れられたが、ブラウズビル近くにあるポートイザベル移民収容センターはその主要施設のひとつであった。筆者もギャレット教授と車で訪れたが、中には入れず、ゲートの撮影だけが許された。メディアは、サンディエゴなどの西部の都市部地域の状況を集中して取り上げる傾向もあるが、こうした東部の状況も把握することなく、国境地域の全体像を語ることはできない。国境は点と点がつながり、ひとつのラインでつながっているのである。

筆者にとって忘れられない経験は、ギャレット教授とともに、テスラの創業者イーロン・マスクが経営するスペース X のロケット発射場を横目

写真4：ポートイザベル移民収容センター（2019年5月24日）



にみながら、片道1時間弱、沈没船や車の残骸などが転がる海岸線を延々と歩き、リオ・グランデ川がメキシコ湾にそそぐ河口までたどりついたことである。すれ違ったのは、ウミガメを保護するNGOのジープ1台だけであった。この一帯はボカチカ国立公園になっており、この入り口までは車で訪れることができるために、そこが米国・メキシコ国境の東端であると勘違いする人間も多い。川の向こう側には、釣りをするメキシコ人が数人みえ、手を振ったら振り返してくれた。川の真ん中が米国とメキシコの国境になるわけであるが、とてもお互い国境や壁などを意識するような環境ではなかった。生活空間としての河川国境を体感した貴重な時間であった。総延長3000キロにおよぶリオ・グランデ川は、テキサス州エルパソから両国の国境線になるわけであるが、国境をまたぐ地域住民の生活空間であると同時に、野鳥や魚など貴重な生態系の宝庫でもあることを認識できた。国立蝶センター（National Butterfly Center）のひとつにも話を伺う機会があったが、この川には世界でもまれにみる多数の貴重な蝶が生息することである。

写真5：テキサス州の農場に建てられた国境の壁（フェンス）（2019年5月25日）



また、学会終了後、ブラウンズビル周辺の国境の壁（フェンス）の実情を知るために国境ツアーに参加した。南テキサスカレッジのスコット・ニコル教授がガイドを務めてくださり、テキサス東部の国境の壁建設の状況に精通した丁寧な説明は有益であった。また国境の壁の建設によって祖先から受け継いだ土地を失うことになるレイ・アンザルデュア氏とフレッド・カバズス氏のお話を伺うことができた。従弟どうしである彼らは、国境の壁の建設予定地にキャンプ場を経営しており、生活の基盤が失われることへの危惧をわれわれに訴えた。壁の建設に伴い、テキサス州における私有地の接収をめぐる、多数の現地住民が連邦政府を相手に訴訟を起こしている現況は日本ではあまり知られていない。

3. 「国境産業複合体」の実態—ナショナル・ホームランドセキュリティ・カンファレンスへの参加

6月17日から20日にかけて、ナショナル・ホームランドセキュリティ・

カンファレンス（National Homeland Security Conference: NHSC）に参加するために、アリゾナ州の州都フェニックスを訪れた。フェニックスは、人口160万人のアリゾナ州最大の都市であり、フェニックス国際空港は米国南西部のハブ空港である。ソノラ砂漠の中に位置するフェニックスは、赤茶けた山々に囲まれており、真夏の最高気温は摂氏45℃にもなる。おそらく市役所の人間であろうか、街中でペットボトルの水を無料で配っている光景があちこちでみられた。真夏のアリゾナでよくみられる日常の風景らしい。吐く息によって喉に痛みを覚えるほどの暑さであったことが忘れられない。

フェニックスのコンベンションセンターで開催されたNHSCは、連邦政府で国境管理部門を一元的に管轄する国土安全保障省（Department of Homeland Security: DHS）、国境管理のテクノロジー開発を担う民間企業や大学・研究機関が一同に会するカンファレンスであり、在外研究の目的のひとつであった「国境産業複合体（border-industrial complex）」の実態を調査するためには格好のフィールドであった。展示ホールには、数十もの企業のブースが出展され、最新の国境管理システムや装備を政府関係者などにPRし、売買契約を結ぶ場としても使われていた。筆者もPureTech Systems、Bench Mark、STRONGWATCHなどの企業関係者と名刺交換したが、居並ぶハイテク機器を横目にしながら、民間セキュリティ産業にとっては、とくに国境管理分野が現在最大のビジネスチャンスなのだと痛感した。カナダのジャーナリストであるナオミ・クライン氏が新自由主義とセキュリティ分野との政策的連関を鋭く論じていることを思い出した⁽¹⁾。アリゾナ州立大学や南コロンビア大学などのブースも訪れたが、学部や大学院修士レベルにおいてホームランドセキュリティに特化した教育プログラムが用意されていた。9.11テロ以降、テロリズム対策（counterterrorism）や自然災害などの緊急時対応（emergency responses）などのホームランドセキュリティ関連科目が大学教育（とくに政治学部や公共政策学部）の中に多く取り入れられるようになったことは、大学・研

写真6：アリゾナ州フェニックスのコンベンションセンターにて
(2019年6月19日)



究機関が政府の国土安全保障政策に重要な構成要素として組み入れられていることを意味し、連邦政府から多額の研究資金を得ている実態も明らかになっている。

4. 開かれた国境ガバナンス—「スマートな国境連合」 定期協議と国境を越える水問題

11月17日、メキシコ・ティファナのクォーツホテルで開催された「スマートな国境連合 (Smart Border Coalition)」の定期協議に出席した。ティファナといえば、米国人が安い歯科治療や薬品をもとめて国境をわたるメディカルツーリズムの本拠地としても有名であるが、会議の開かれたホテルは、ホテル内部に病院や各種セラピー関係の施設を併設し、メディカル・コンプレックス (医療複合施設) としての機能も果たしていた。車でメキシコ国境まで向かい、国境検問所付近の駐車場に車を止め、歩いて国境を

渡った。サンイシドロに新しく完成した国境検問所で入国チェックを受け(入国カードを記入する)、ティファナにわたるとすぐにラテン系の音楽が聴こえ、メキシコの熱気がじわじわと伝わってきた。国境を越えると一瞬で風景も様変わりする。お互いの違いに気づく瞬間である。歯科医院と薬局の多さには本当に驚く。通りがほぼすべて薬局というところもある。ツアーリストが一番集まるダウンタウンのレボルシオン通りを歩き、イダルゴ市場などを散策したあとホテルに早めに入った。以前より治安がよくなったとはいえ、殺人や誘拐で名の知れた街でもあっただけに、暗くなってからひとりで歩くのは危険であると感じたからである。

「スマートな国境連合 (smart border coalition)」定期協議であるが、1991年に創設され、ビジネス界を中心として、人の移動と物流に関する国境の通過をいかにスムーズに行えるのかについて政策提言を行う市民フォーラムである。毎月、サンディエゴとティファナで交互に開催され、一般にも公開されており、ホームページ上で登録を行えば誰でも出席できる。ホームページには、サンディエゴ・ティファナ国境地域の3つの国境検問所(サンイシドロ、オタイメサ、テカテ)における国境の通過時間 (Border Wait Times) が数分おきに更新されている⁽²⁾。国境のステークホルダーとして、両国の領事館やCBPなどの国境管理部門、商工会議所、VESTA、Frasa、Sempra Energy、Cubic Corporationsなどの企業、UCSD、SDSU、COLEFなどの両国の大学が名を連ねている。この定期協議体は、貿易や物流などの経済問題を議論の中心としてきたが、近年はウイングを広げ、国境地域に共通する環境・エネルギー問題や救急医療に関する問題などについても協議するようになり、「革新的な国境チャレンジ」を掲げて活動を行っている。

この会議に参加するために、ティファナの中心を流れるティファナ川に架かる橋を渡ったが、その汚染水からと思われる汚臭は強烈であった。水質もかなり悪化していることは素人の目からもすぐに分かった。いうまでもなく陸続きの国境であるために、河口のサンディエゴの海へとつながっ

ている。河川の汚染は国境地域にとって死活的な問題であり、トランスボーダーな環境問題へのアプローチは国境地域のガバナンス形成と表裏一体である。ほぼ同じ時期に、SDSUにおいて、水資源をめぐるカンファレンスが開催された。SDSUのポール・ギャンスター教授がオーガナイザーの一人であり、「よき隣人環境委員会」(Good Neighbor Environment Board: GNEB)の議長を長年務めている⁽³⁾。その年次報告書は、合衆国大統領、副大統領、下院議長に対してギャンスター教授の名前で提出され、米国・メキシコ国境地域のすべての環境プロジェクトにアドバイスをを行う位置づけをもつ。この国際カンファレンスでは、水質保全、洪水・浸食対策、データ共有がメインテーマであった。トランスボーダーな環境問題の特質は、二つのボーダーは存在しても共有する課題はひとつであるということである。そのためにも、国家間レベルばかりではなく、リージョナルあるいはローカルなレベルでのデータ共有が極めて重要であり、そのシステムの構築に対して、大学・研究機関がいかに関与していくのかという問題提

写真7：サンディエゴ・ティファナ国境地域の水資源をめぐるカンファレンス
(2019年11月25日)



起がなされた。経済的に弱い立場にある側が環境上の影響を受けやすいといことは世界共通であるが、サンディエゴ・ティファナ国境地域は、水をめぐる国家間の対立・紛争が存在しない稀有な性質をもっているために、この国境地域での取り組みがどのように貢献できるのかに注目が集まっているとした。

5. 国境を守る側のミッション—米国国境警備隊による 国境パトロールツアー

11月後半には、米国国境警備隊 (USBP) のサンディエゴ・セクターが主催する国境パトロールツアーに参加する貴重な機会を得た。現在の国境警備隊は、2003年に創設された国土安全保障省の税関・国境警備局 (Customs and Border Protection; CBP) の下部組織として位置づけられ、全米に20のセクターがある⁽⁴⁾。これは、ワシントン D.C. の CBP 本部に知己が多いギャンスター教授 (SDSU カリフォルニア地域研究所所長) が企画してくれた。ギャンスター教授は、1976年に創設された境界・国境地域研究学会 (Association for Borderlands Studies; ABS) の創設者のひとりであり、境界研究を専門とする者で知らない人間は誰もいないといえるほどの人物である。2014年に札幌で開催された国際シンポジウムで私がギャンスター教授の報告されるパネルで司会を務めたことがきっかけで知り合った。SDSU では隣の建物に所長室兼オフィスがあるので、アポをとってすぐにお会いできることに、在外研究の醍醐味のひとつを感じた。

本題に戻れば、この国境パトロールツアーに参加する目的なども含めて、私のバックグラウンド調査と渡航関係書類の提出から始まった。その調査をクリアした上で、チュラビスタにあるサンディエゴ・セクターの本部に出向き、まず広報担当の2人の国境警備隊エージェントのブリーフィングがあった。ひとはニューメキシコ出身の女性であったが、国境警備隊には女性エージェントも多数いる。まず、1980年代以降のサンディエ

ゴ・セクターの国境警備をめぐる状況について、ビデオ映像をみながら説明してくれた。その後の質疑応答では、国境で検挙される移民の国籍別割合、エージェントの養成方法、国土安全保障省の中でのCBPの役割、太平洋をのぞむサンディエゴ・セクターの海上国境警備の現状などについて質問した。ギャンスター教授のレクチャーも時折入り、有益な時間となった。その後、USBPの車にのり（残念ながら、あのグリーンのストライプの入る国境警備用の車両ではなかった）、サンディエゴ南部のオタイメサにある国境検問所に向かった。次にサンイシドロの国境検問所付近を通過し、最後は、米国・メキシコ国境の最西端であるボーダーフィールドステートパークに向かった。一般人は誰も入ることのできない第一フェンスと第二フェンスの間を時々停車しながら走り抜けたのであるが、国境から米国とメキシコの街並みの双方をみることができ、麻薬組織がトンネルを掘った場所や30フィート（約9メートル）の壁にも実際に触れることができた。このツアーの数日前には、メキシコの麻薬組織がどこでも手に入る電動ノ

写真8：奥に太平洋をのぞむ第一フェンスと第二フェンスの間から、右側が米国、左側がメキシコのティファナ（2019年11月13日）



コギリで第一フェンスを切り取ったニュースが流れただけに、国境警備隊も普段よりも緊張感が増している感じを受けた。移民に対する暴力などでもメディアで取り上げられることもある国境警備隊ではあるが、命の危険を顧みずに国境を守るミッションに満ち溢れたエージェントの話をじかに聞くことができたことも貴重な経験となった。

6. オルガンパイプ国定公園と環境破壊—アリゾナ州再訪

12月4日から8日まで、アリゾナを車で再訪した。サンディエゴからは東に7時間の旅であったが、カリフォルニアからアリゾナに向かう車窓の変化は著しいので十分に楽しんだ。風力発電が30基は並ぶ広大な丘陵地帯を抜けて、ソノラ砂漠に入るのだが、赤茶けた砂漠ではない。アリゾナは、世界でもまれにみる緑の砂漠地帯である。この再訪のメインの目的は、アリゾナのツーソンを拠点として活動している国境ジャーナリストのトッド・ミラー氏に再会するためであった。米国とメキシコの国境問題を中心に世界中の国境を取材しているミラー氏は、「調査ジャーナリズム (investigative journalism)」という立場から、「ニューヨークタイムズ」や「ネイション」などへの寄稿や多数のメディア出演を通じて、米国の国境管理政策の実態について問題提起してきた気鋭のジャーナリストである。主著は、『国境警備国家 (Border Patrol Nation)』(2015年)、『壁を急襲する (Storming the Wall)』(2017年)、そして2019年に出版した『壁の帝国 (Empire of Borders)』の3冊である⁽⁵⁾。いずれの著作も米国をとりまく国境問題を考える際には必読の文献とっていいだろう。トッド氏とは、5月にテキサスのブラウンズビルで開催された学会、6月のアリゾナ訪問、8月に彼が休暇でご家族とともにサンディエゴを訪れた際にもお会いしたので、1年もたたない間に4回も会う機会を得たことは、今後の研究を進める上で極めて有益であった。

まずツーソンに到着した翌日、メキシコ国境の方へ南下し、アリバカ

(Arivaca) という人口800人の小さな町に向かった。なぜこの小さな町を訪れたのかといえば、国境管理の現状が著しく軍事化およびゾーン化している町であったからである。町に2つしかないレストランの一つでトッド氏と昼食をとったのであるが、窓から行き来する国境警備隊の車両の多さには驚いた。メキシコ国境からは少し離れているのであるが、町の近くには国境警備隊のステーションがおかれ、国境を越えてきた不審者がいるかどうかをパトロールしているとのことであった。国境は実際に引かれたラインよりも国家の内部に浸潤していることを如実に物語る光景であった。アリバカは、国境を守る自警団組織（ミリシャ、すなわち民兵組織という人も多い）が常駐している町としても有名であった。「アリゾナ・ボーダー・レコン（Arizona Border Recon）」という自警団組織は、国家に協力して主権や国境を守る活動を自発的に行っているということであるが、何の権限もない彼らが武装して国境を警備していることへの批判も多く、実際にアリバカでは、自警団組織が子どもを含む一般市民に対して暴力を振るう事件も発生し、昼食をとったレストランの入り口には、“ミリシャお断り！”という張り紙が貼ってあった。

レストランの向かい側には、移民のレスキュー活動を行っている人道援助オフィスがあった。アポなしで突然訪れたが、快くインタビューを引き受けてくれた。最近働き始めたばかりのジェリー氏に話をうかがうことができたのだが、退職されてアリバカに引っ越し、オフィスから車で10分程度のところに新居を構えられたとのことであった。自宅脇には、イスラエルのエルビット社が開発した統合監視タワー（Integrated Fix Tower：IFT）があるらしく、自宅周辺はおろか半径数キロに及ぶ範囲で監視活動が行われているそうである。高性能カメラ、レーダー、地上センサーなどを搭載した国境管理システムであり、国境は単にラインとしてだけでは描写できないということを改めて思い知らされた。上空を国境警備隊のヘリコプターも飛んでいるようであった。こうしたタワーが多く建てられているのはアリゾナであり、トッド氏の言葉を借りれば、アリゾナはいま国境

写真9：アリゾナ州アリバカに設置された統合監視タワー（2019年12月3日）



管理システムの「実験場」になっているのである。

また、トッド氏の紹介で、ツーソン・サマリタン（Tucson Samaritan）による移民の搜索・救出活動にも特別に参加・見学することができた。これは、2002年7月より、メキシコとの国境沿いのソノラ砂漠で日常的に移民の搜索・救出を行っている人道援助団体である。緊急医療救護を行い（医者や看護師もいる）、水や食料などの物資を砂漠においてくることに加えて、移民の砂漠における痕跡をチェックすることが主要な活動である。国境警備隊とも取り決めを結び、相互理解の中で活動を行っており、もちろん私有地に入ることはない。朝7時にオフィスに集合して、GPSの機能チェックをし（砂漠の中での活動なのでもっとも重要な事項）、物資を積み込み、メキシコとの国境の町ササベ（Sasabe）周辺を巡回し、オフィスに戻ってきたのが16時を過ぎていた。4輪駆動車で一日中悪路を走り回ったが、まさに道なき道を行くという感じであった。砂漠で小さな子どものパンツやリュックサックなどを発見したときは、だれも言葉を発せず、沈黙のときが続いた。真夏には50度近くにもなるが、夜は凍えるほどの寒さになる。砂漠には大きなとげのついたサボテン（オコティーヨ）があちこち

写真10：国境のメキシコ側で散乱する水のペットボトル、
アリゾナ州ササベにて（2019年12月5日）



にあるので、ケガをすところではすまない。移民の死亡原因は、もちろん熱中症も多いが、実は脱水症状や低体温症で死亡する場合がそれよりも多いのだと、リーダーのひとは車中で話してくれた。知られざる現実である。

翌日は、ツーソンから車で2時間北上し、州都フェニックスに向かった。フェニックスのブックストアでのトッド氏の新著“Empire of Borders”と、日系アメリカ人作家・詩人のブランダン下田氏の新著“The Grave on the Wall”^⑥の出版記念をかねたブックトークが開かれた。米国では、様々な新著が出版されると、ブックストアが「注目の書」として読者にお薦めする新著をいくつか選び、その著者を実際にブックストアに招いてブックトークを開催するという出版文化がある。大抵は、一般の人が仕事を終えて帰宅する時間に合わせて、夜の7時ぐらいにはじまる場合が多いのであるが、たまたま居合わせた学生やお年寄りなど様々な「聴衆」で会場は埋まる。日本にも、都市部ばかりではなく、一層普及してほ

しい文化のひとつであると思う。ブランダン下田氏は日系三世であり、祖父が広島、祖母が熊本出身だそうである。筆者と同年代で、日本にもたびたび取材で訪れている。父親は米国で生まれ育った二世であるが、その生まれ育った環境などから、日本や日本人に対しては複雑な感情をもっていたので、自分もその影響が強いと語ってくれた。

ブランダン下田氏のこれまでの活動は、みずからのアイデンティティを叙情詩的な表現によって探りながら、米国における日系アメリカ人の強制収容の実態を暴くことであった。父親から受けた日本や日本人に対する固定的なイメージを払拭しようと苦闘している軌跡そのものでもあった。日系アメリカ人はおろか、米国史の中で自己イメージとそぐわない「他者」は排斥され、隔離されてきた事実は、自由と民主主義を建国の理念と掲げてきた米国の歴史的使命とつねにコンフリクトを生じさせる。中米諸国から逃れてきた移民とその子どもたちが引き離されて収容センターにいれたことは、最近の出来事であり、時代と問題状況は異なるにせよ、「危機」と恣意的に時代を枠組みづけてしまえば、他者を「無期限の勾留」(米国の哲学者ジュディス・バトラー)においてしまうパラレルを想起してしまった⁽⁷⁾。いま声高に叫ばれる「ホームランドセキュリティ」という安全至上主義の言説もそれを物語る⁽⁸⁾。国家の境界と人間のアイデンティティをめぐる社会・文化的な境界の齟齬は、歴史的に生産・再生産されてきたのだと認識した。トッド氏は、米国の国境がその実際の領土を越えてグローバルに拡大していることを「壁の帝国 (Empire of Borders)」と呼んだのであるが、下田氏は、日系移民強制収容所を「壁の前哨基地 (Outposts of the Border Walls)」と位置付けていた。壁を造ることによって、外部にも内部にも国境の拡張を図る米国の方向性に警鐘を鳴らしているという点で、取り上げた本のテーマは別であっても2人には共通項があったのである。

ツーソンからの帰路、今回の調査目的のひとつでもあったオルガンパイブ国定公園 (Organ Pipe Cactus National Monument) に立ち寄った。宿泊

先は、アホ (Ajo) という鉱山で栄えた町にとったが、この人口3000人ばかりの小さな町にも国境警備隊のプレゼンスが増していることを肌で感じた。パトロールしている警備車両が多かったためばかりではなく、ヘリポートを兼ね備えた国境警備隊ステーションの近代化した施設を目にしたからでもあった。オルガンパイプ国定公園が有名なのは、米国ではここでしかみられないパイプオルガン (の形をした) サボテンが生息する観光地としてである。メキシコではよくみられるとのことであるが、高さが4メートルにもなるその巨大さには圧巻するばかりであった。最近、この国定公園が多くメディアで取り上げられる理由は、トランプ政権が造る国境の壁の最前線にもなっているからである。国境検問所のある町ルークビル (Lukeville) も、この国定公園の中にある。メキシコへとつながるメインの道路から外れた、小さな舗装もされていない道を進むと国境の壁 (フェンス) を間近にみることができた。その途中には、「密輸取引や不法移民に注意」というサインもあった。ここは、国連教育科学文化機関 (UNESCO) の生物圏保護区 (biosphere reserve) としても指定された貴重な自然の宝庫であり、パンフレットには“A Desert Full of Life”とある。サボテンばかりではなく、希少な鳥や爬虫類も観察できるらしい。ここでいま何が起きているのかといえば、国境の壁を造るためにサボテンを除去しているのである。連邦政府は移し替えているだけとの主張をしているようであるが、環境保護活動家にいわせれば、まさに根こそぎ伐採しているという。この件に関して、2020年2月にも新しいニュースが入ってきた。丘陵の多い地形のために、土地を平らにすることが効率的であるという理由から大量の爆薬を使い始めたことは、環境保護活動家に大きな衝撃を与えた⁹⁾。また、壁建設のために用いるコンクリート用の大量の水が必要になるが、この貴重な生物圏保護区の帯水層から水を組みだして利用しているらしく、生態系に与える影響が危惧されている。その後、国境検問所のあるアリゾナ州のユマ (Yuma)、サンルイス (San Luis)、カリフォルニア州のカレキシコ (Calexico) を経由して帰路についたのであるが、いずれ

写真11：「密輸取引と不法移民に注意」とのサイン、
オルガンパイプ国立公園にて（2019年12月7日）



写真12：警戒監視中の国境警備隊の車両（左側2台）、
カリフォルニア州カレキシコにて（2019年12月8日）



の場所においても国境管理が強化されている現状を多角的に観察することができた。

7. マンザナー日系アメリカ人強制収容所—

担当科目である平和学と政治学原論の生きた教材

サンディエゴで年を越し、前年のブランダン下田氏との出会いもあり、どうしても気になっていった場所に行くことにした。戦争と人種差別を取り上げる平和学、そしてシチズンシップ（市民権）とは何かを考察する政治学原論の生きた教材に触れたいという思いもあったからである。そこは、カリフォルニア州のロサンゼルス北東部にあるマンザナー日系アメリカ人強制収容所であった。アメリカ全体には10の収容所が存在したが、マンザナーは2番目に収容人数が多かったことで知られる（ピーク時には収容人数は1万人を超えた）。マンザナー収容所は、正式には、「戦時移住センター（War Relocation Center）」と呼ばれているが、法の手続きをいっさい経ずに、単に「日系アメリカ人」とであるという人種的理由だけで12万人以上の日系人を強制的に収容・隔離したという意味では、まさに「強制収容所」と位置付けられる。ある日系アメリカ人が遺した言葉がある。「われわれは人格によってではなく、人種によって判断されたのだ（We are judged not by our characters, but by our race）」と。この収容・隔離政策を大統領令9066によって指示したフランクリン・D・ルーズベルト大統領は「強制収容所」と呼んでいた。マンザナー収容所には36のバラックが立ち並び、周囲は有刺鉄条網のフェンスで囲まれ、いくつもの監視塔が存在していた。まずそこに立って驚いたのが、吹きっさらしの強風である。バラックは板で作られた簡易な構造であり、冷たい風とそれに飛ばされた砂が室内に入り込み、どれだけ耐え難い思いをしたのかは想像に難くない。バラックには敷居もなく、簡易式のベッド（スプリングむき出しの硬いベッドの上に薄い布団が敷かれてあった）と小さな机があるのみであった。シャワ

ーも8個のシャワー口が無造作に壁に取り付けてあるだけで、極めつけはトイレである。復元されて展示用に公開されている女子トイレには、敷居も何もない便器が横一列に並んであった。

このような場所で自由とプライバシーのない隔離された生活が何年も続いたのである。収容所の中には学校もあった。戦時中、米国への忠誠を誓わせるために行った市民権アンケート (citizenship questionnaire) はとくに有名である。6月にフェニックスにあるハード博物館 (米国先住民族の文化や芸術を展示する博物館) を訪れた際に学んだことであるが、米国先住民族を同化させるための寄宿学校 (boarding school) 政策と類似していると思った。言語、文化、風習ばかりではなく、人間のアイデンティティや内面までも強制的に変えようとする戦時政策は、いつの時代にもあった。そうした生活の中にも祖国日本への思いを掻き立て、潤いをもたらそうと、収容所の中に日本庭園や柔剣道場を造ったり、盆栽の展覧会を開催したりする試みもあったことに胸をなでおろす思いであった。この施設の中には、ここで亡くなった人を弔う慰霊塔と墓地がある。どのような思いでこの荒涼とした土地で人生を終えたのか。戦争の記憶が風化する現在、この生きた教材を学生たちにリアルに伝える重要性を痛感した。

訪問した翌月の20日、カリフォルニア州が収容所にいた日系アメリカ人に公式に謝罪するというニュースが入ってきた⁽¹⁰⁾。2月20日は、ルーズベルト大統領が大統領令9066に署名した日であり、それから78年後の出来事であった。カリフォルニア州議会議員であり、日系アメリカ人であるアルバート・ムラッチ氏が起草し、全会一致で可決されたのである。1988年、レーガン政権は「市民自由法 (Civil Liberties Act of 1988)」を制定し、連邦政府としての公式な謝罪とひとりあたり2万ドルの補償を行ったが、当時の隔離・強制収容政策を支持したカリフォルニア州が州としての公式な謝罪を行った意義は大きい。追加の補償は一切なく、あまりに時間がかかりすぎたという声が日系アメリカ人の中からもれたことも事実である。起草者であるムラッチ氏が、日系アメリカ人がたどった悲劇と、移民とそ

写真13：マンザナー日系アメリカ人強制収容所の慰霊塔（2020年1月5日）



の子どもたちを引き離して収容するゼロトレランス政策や特定の国からの入国禁止措置命令などの現代の例を示しながら、この決議の意義を語っていた。人種差別の歴史を絶対に繰り返してはならないという先人たちの思いと、現在の分断化された米国の政治状況への深刻な懸念が生み出した明確な意志表明として理解することができるだろう。

8. もうひとつの国境地域—エルパソ・シウダーファレス 国境地域

2020年1月末、境界研究の理論や米国・メキシコ国境地域研究の泰斗であるキャサリン・シュタウト名誉教授とジョシア・ハイマン教授にインタビュー調査を行うために、テキサス州エルパソを訪れた。サンディエゴ・ティファナ国境地域は、米国・メキシコ国境における人口や経済規模などの観点において最大の国境地域であるが、テキサス州エルパソとメキシコのチワワ州シウダーファレスは、第二の国境地域といってよいだろう。エ

エルパソといえば、2019年8月に、ヒスパニック系を標的にした銃撃事件が大型スーパーチェーン・ウォルマートで発生し、22人が殺害され、日本でも大きくメディアで取り上げられた。アメリカ社会に蔓延するヘイトクライムの惨劇として歴史に残されることになった。エルパソは人口約70万人のテキサス西部最大の都市であり、ヒスパニック系が人口の6割を占める。エルパソの街からは、国境の壁のすぐ向こう側にシウダーファレスの街並みがみえる。ここまで視覚的に国境地域が一体化している場所も珍しいといえるほど、壁がなければひとつの都市と思ってしまう。

シュタウト名誉教授は、40年近くテキサス大学エルパソ校 (University of Texas at El Paso; UTEP) で研究・教育に従事され、境界研究の学会である Association for Borderlands Studies (ABS) から終身栄誉賞を受賞されたことからわかるように、学問の発展に多大な貢献をされた方である。すでに退職されているので、ご自宅近くのカフェでコーヒーを飲みながら、境界研究の来歴と現在、エルパソを中心とした米国・メキシコ国境地域の現状、独自に開発された国境地域の経済的格差をデータ化した国境不平等インデックス (Border Inequalities Index)、2年前に出された新著の内容など、多岐にわたってお話いただいた。日本にも学会を含め3度訪問されたことがあるようで、陸域国境ばかりではなく、海域国境を比較研究する重要性にも触れられた。気さくなお人柄で、快くインタビューをお引き受けくださり、退職された今もお研究への意欲を語る姿勢に頭が下がる思いであった。

次に、ハイマン教授に会うために、UTEPのキャンパスを訪問した。UTEPの学生の8割がメキシコ系アメリカ人であるといい、毎日国境を越えて通学する学生も数多くいる。キャンパスの建物すべてがブータンの建築様式なのには驚いた。エルパソを囲む山々の色とマッチするという理由からであった。UTEPの米州・境界研究センター (Inter-American and Border Studies Center) 所長をされているハイマン教授は、米国・メキシコ国境地域、とくに「国境の軍事化 (border militarization)」に関して多く

の研究業績を残してこられた人物である。忙しい時間の合間に快く所長室で迎えてくれた。とくにメインでお聞きしたかった点は、政治学、国際関係論、平和学における「軍事化 (militarization)」という概念の多用によって、その概念の本来の意味が希薄化しているのではないかという筆者の質問に対して、社会的混乱を抑圧的な手段（ときに、軍事的な手段）でコントロールするという広義の意味でまず把握した上で時代や社会的状況によって研究者が概念を読み替えていけばよいのではないかと示唆された。また、エルパソ・シウダーファレス国境地域における一般市民への大規模なアンケート調査も最近実施されたとのことで、現場の声を研究者としてどのように反映させていくべきかについても語っていただいた。現場に構造的に隠されている声なき声に研究のヒントが埋もれているはずだとも述べていた。ただ、地域によっては、国境を越えることには常に危険が伴うので、それをよく自覚してほしいとのアドバイスもいただいた。インタビューの1週間前にも、シウダーフェレスでは何者かに女性ジャーナリストが殺害された。かつては麻薬カルテルの抗争の最前線であり、世界で最も危険な場所に名を連ねる都市だけに臨場感が違った。エルパソ・シウダーファレス国境地域は、FBI や CIA などの米国の治安・諜報組織とメキシコの麻薬カルテルの抗争を取り上げた映画『ボーダーライン』（主演：エミリー・ブラント）の舞台でもある。

翌日は、世界の国境係争の中で、両国の平和的交渉によって国境を画定したチャミザル紛争の記念碑があるチャミザル国定公園 (Chamizal National Monument) にも足をのばした。両国の国境であったリオ・グランデ川は、エルパスとシウダーファレスの間で大きく蛇行し、それが長年の時間を経て、流路の変更につながり、洪水などの大きな被害が生じるようになった。これを解決するために、両国の協力によって、古い流路をせき止めた上で新しい水路を築いたのであるが、それによって、現在国定公園があり、かつてはメキシコ領であったコルドバ島の一部がアメリカ側の領土になり、メキシコ側住民の立ち退きなども起こった。メキシコ側にも

一部土地が割譲されたために、アメリカ側の住人の移住も余儀なくされた。また人工的な流路の変更は、国境線には影響を与えないという国際法の観点から国際国境委員会の調停なども行われたが、アメリカ側が調停仲介案に従わない時期が長く続いた。最終的には、1964年、米国のジョンソン大統領とメキシコのマテオス大統領の会談によって、国境線を画定する外交的解決が図られた。国境線を平和的交渉と外交的解決によって画定したという意味において、世界の国境係争史に名を刻む出来事であった。強調すべきは、洪水などの災害に苦しむ国境地域に住む人間やコミュニティの真の利益を考慮すれば、政治的決断の着地点がどこに求められるのか、それを下す政治家の洞察力と判断力が問われる出来事であったといえる。海域において領土問題を隣国と抱える日本にとっても、海を隔てて向かいあう国境地域の共存のために必要な視点や施策を考える上で手がかりになる。

写真14：米国とメキシコのかつての国境標石（壁やフェンスではなかった）、
チャミザル国立公園にて（2020年2月1日）



おわりに

ここでは、1年間にわたる在外研学生活の全体像を報告したが、サンディエゴを拠点として国境地域におけるさまざまな人間や組織の国境への向き合い方を多角的に考察することができた。国境の壁建設の影響がどのように人々の生活に影響を及ぼしているのかを考えると同時に、守る側の組織に属している人間の考え方にも触れることができた。境界研究の方法を用いて国境地域におけるガバナンス形成をどのように分析していくのか。境界研究は、方法論的広がりのある領域でもあることを再認識した。米国滞在中にインタビューなども含め面会することのできた研究者は、境界／国境（ボーダー）を主題として、政治学、地理学、歴史学、経済学、人類学、都市計画、芸術などを専門としていた。

建築物としての壁（フェンス）という視点でとらえれば、建築家のロナルド・ラエル（Ronald Rael）氏とバージニア・サン・フラテロ（Virginia San Fratero）氏がニューメキシコとシウダーファレスとの国境の壁にシーソー“Teeter Totter Wall”を設置し、国境の両側にかかるシーソーで子どもたちが遊ぶ風景は日本でも報道された⁽¹¹⁾。米国・メキシコ関係の浮き沈みをシーソーの支点を軸として表現し、国境の壁をフレンドシップの象徴として用いる逆の発想である。またティファナではよくみかけたが、メキシコ側の壁にはボーダーアートとしてさまざまな絵が描かれている場所も多い。チカーノの壁画芸術は世界的に名声が高く、サンディエゴのチカーノ・パーク（その周辺はメキシコ人居住区）にあるコロナド橋の橋脚には絵が全面に描かれている。社会に対する問いかけを、建築物やアートとして表現する。このように境界研究は、学知の協働によってしか切り込めない分野なのである。

現場に身をおくことによってしか見えない問題や考え方があり、これらにじかに触れられたことは、在外研究における定点観測が今後の研究に有

益になると考えている。筆者にとっては、大学院時代以来、14年ぶりの米国での研究生生活となったが、米国のプロフェッショナルリズムの凄みを改めて体感しながら、自分なりの研究ネットワークを構築できたことも貴重な財産になった。そのような意味において、在外研究の終了は新しい研究のスタート地点にたつことでもある。そして、研究のささやかな成果は、講義やゼミにおける教育活動においても反映させていくことはいうまでもない。社会情勢が不安定な時期が長く続けば、学生たちの視線も内向きになりがちであるが、相互依存の深化するグローバル化の時代において、世界の動きは、よくも悪くも自分たちに跳ね返ってくることを十分に認識して、外部世界とかかわっていこうとする姿勢が大切になってくる。異文化と他者との相互理解や共生をいかにはかかっていくのかは、壁を造ることではみえてこない。国境は内部を守る砦や要塞としても機能するが、外部世界へ開かれたゲートウェイにもなるということに気づく必要もあるだろう。さらなる研究・教育活動の進展を期して、本報告を閉じたい⁽¹²⁾。

謝辞：

2019年度の中央学院大学在外研究員規程の利用にあたり、学校法人中央学院、中央学院大学の教職員のみなさまに対して、改めて感謝を申し上げたい。また、有益な在外研究生生活を過ごせたのは、サンディエゴ州立大学(SDSU)の先生方のサポートのおかげである。とくに、ミハイル・セルゲーエフ教授(政治学部)、ポール・ギャンスター教授(カリフォルニア地域研究所所長)、ジェームズ・ガーバー名誉教授(経済学部)には、フィールド調査も含めてご指導いただいた。現地到着後の連絡にもかかわらず、歓迎していただいたSDSUの日暮嘉子名誉教授(言語学部)、中村光太郎名誉教授(芸術デザイン学部)、佐藤純一教授(芸術デザイン学部)、奈良温准教授(地理学部)にも心より感謝申し上げたい。また、在外研究の受け入れ先を決定する上でアドバイスを頂いたトニー・バヤン教授(ライス大学米国・メキシコ関係研究センター所長)、テレンス・ギャレット教授(テキサス大学リオグランドバレー校)にも御礼を申し上げる。国境ジャーナリストのトッド・ミラー氏には、取材を通じて、国境地域で暮らすさまざまな人々を紹介していただいた。謝意を表したい。

注

- (1) ナオミ・クライン (幾島幸子・村上由見子訳) 『ショック・ドクトリン 〈上〉 〈下〉 — 惨事便乗型資本主義の正体を暴く』岩波書店、2011年。
- (2) 「スマートな国境連合」ホームページを参照。https://smartbordercoalition.com/
- (3) 米国環境保護局 (EPA) のホームページを参照。https://www.epa.gov/faca/gneb
- (4) 米国移民・税関執行局 (CBP) のホームページを参照。https://www.cbp.gov/border-security/along-us-borders/border-patrol-sectors
- (5) Todd Miller, *Border Patrol Nation: Dispatches from the Front Lines of Homeland Security*, City Lights Publishers, 2014; idem, *Storming the Wall: Climate Change, Migration, and Homeland Security*, City Lights Publishers, 2017; idem, *Empire of Borders: The Expansion of the US Border Around the World*, Verso, 2019.
- (6) Brandon Shimoda, *The Grave on the Wall*, City Lights Publishers, 2018.
- (7) ジュディス・バトラー (本橋哲也訳) 『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』以文社、2007年。
- (8) 拙稿「ホームランドとしてのアメリカ—言説分析を中心として」『中央学院大学法学論叢』21巻1号、2007年。在外研究中、このテーマに関して、アメリカ文学研究者たちが瞠目すべき著作を出版した。小谷耕二編『ホームランドの政治学—アメリカ文学における帰属と越境』開文社出版、2019年。
- (9) Ryan Devereaux, Trump Is Blowing Up a National Monument in Arizona to Make Way for the Border Wall, *The Intercept*, February 7 2020. https://theintercept.com/2020/02/06/border-wall-construction-organ-pipe/ (閲覧日: 2020年2月25日); Audrey McNamara, Arizona national monument, home to sacred Native American burial sites, is being blown up for the border wall, *CBS NEWS*, February 7. 2020. https://www.cbsnews.com/news/organ-pipe-cactus-national-monument-blasts-arizona-national-monument-being-blown-up-for-border-wall-2020-02-07/ (閲覧日: 2020年2月25日)。
- (10) Cuneyt Dil, California apologizes for Japanese American internment, *AP*, February 21, 2020. https://apnews.com/4b9234383de4814974f81e78a1edaa95 (閲覧日: 2020年3月5日); Gillian Brockell, Japanese Americans were sent to camps with California's help. Now the state will apologize. *The Washington Post*, Feb. 20, 2020. https://www.washingtonpost.com/history/2020/02/19/japanese-americans-were-sent-camps-with-californias-help-now-state-apology-is-coming/ (閲覧日: 2020年3月5日)。
- (11) Ronald Rael, *Borderwall as Architecture: A Manifesto for the U.S.-Mexico Boundary*, University of California Press, 2017; Sarah Cascone, *Artists Briefly*

Bridge the US-Mexico Border With a Heartwarming Seesaw Linking Kids in Both Countries, *Artnet news*, July 30, 2019, <https://news.artnet.com/art-world/us-mexico-border-teeter-totter-wall-1612897> (閲覧日: 2020年3月10日). なお、境界研究 (ボーダースタディーズ) を参照しつつ、建築物としての国境の壁とその二元論を乗り越える方法を論じたものに以下がある。稲垣拓「二元論の『壁』を越えて: 分断の場から創造の場へ」日本建築学会月刊ウェブマガジン『建築討論』、2019年9月1日。 <https://medium.com/kenchikutouron/仮-二元論の-壁-を越えて-断絶の場から創造の場へ-近日公開予定-112a40096b> (閲覧日: 2020年3月16日)。

- (12) 本報告の簡略版は、中央学院大学ホームページに掲載された。 https://www.cgu.ac.jp/faculty/law/teacher/f-kawakubo_sandiego.html